

## 第71回アメリカ自然人類学会に参加して

生態管理ユニット SPRAGUE, David Shigeru

自然人類学会は生物としての人間の研究を目的に組織され、多くの生態学者が参加している。今回参加した、2002年4月10日～13日にアメリカのニューヨーク州バッファロー市で開催された第71回アメリカ自然人類学会（American Association of Physical Anthropologists）にも、人と野生動物の関わりについての研究が多数発表されていた。さらに、農業などの生業活動が人の骨格、人口動態、病気にあたえる影響に注目する生態学的あるいは考古学的な研究の発表も多数あった。

私の「農業環境におけるニホンザルの生息地に関する研究」のポスター発表の向かい側にはアフリカのセネガルでの人とチンパンジーの競合についてのポスター発表が行われていた。ワールドカップで活躍したセネガルでは、自生している蔓性のキョウチクトウ科 Saba 属の果実を農民が大量に収穫して町に出荷するが、この果実はチンパンジーの大好物でもあり、人間と野生動物とが食べ物をめぐって競合をしているという話題であった。口頭発表の会場ではケニアのタナ川の河辺林の保全がうまくいっていないという話しが印象的だった。河辺林にはサルも含めて多くの貴重な生物が生息しているが、当然ながら同じ林を周囲の人々が資源を求めて利用している。そこに、さまざまな行政機関やNGOが住民にいろいろな保全策を押し付けるが、住民が反発して保全策は失敗している、という結論であった。

この学会の開催地であるバッファロー市は五大湖のひとつであるイアリー湖畔に位置し、ニューヨーク州にあるとはいえ、有名な大都市ニューヨークとは州の正反対にあるので、到着す



学会会場ホテル（マダムズ・マーク ホテル）

る前からかなりの田舎町を覚悟していた。この町は、五大湖の周囲に発展した工業のおかげで繁栄した歴史を誇り、アメリカの近代建築史にとっては重要なオフィス建築の創成期に建築ブームを経験したらしい。ホテルでもらったガイドのパンフレットを手に持って町を散歩すると、面白い建物を見物できた。世界ではじめての高層オフィスビルは今となってはかなり可愛いらしいビルだが、ロビーに細い装飾が施されている品のよいビルであった。今でも現役らしく、一階、目抜き通りに面しているオフィスは改装中であった。20世紀初頭のアール・デコスタイルの市庁舎もなかなか立派であり、この庁舎前で遠回りながら日本とのつながりを発見した。市庁舎の前に第13代大統領ミラード・フィルモアの銅像がたっていたので、説明のプレートを読むと、フィルモアはバッファローの出身とわかった。このフィルモアはニューヨーク州選出の国会議員として国政の道を歩みはじめ、後に大統領として日本に開国を求める書簡をペリー提督に託したのであった。